



中山道 愛知川宿

滋賀県立安土城考古博物館

嘱託 江竜喜之

＜愛知川宿の成立＞

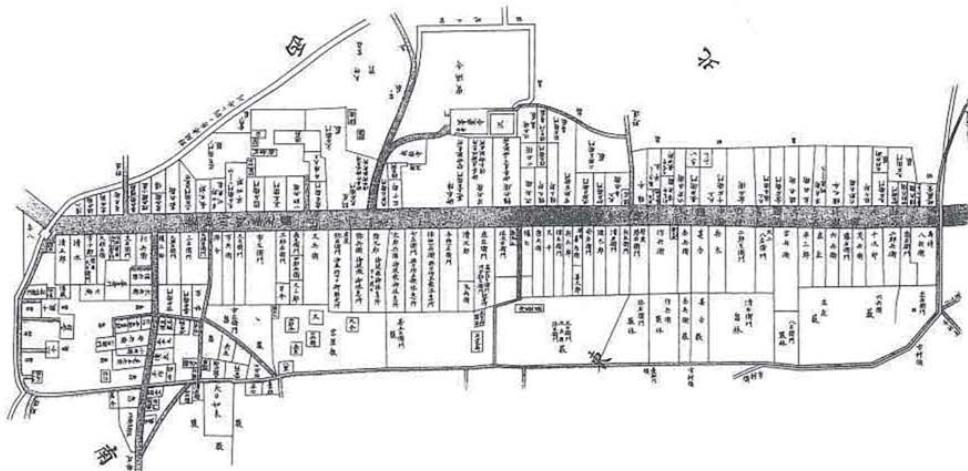
愛知川宿は、近江有数の大河、愛知川のほとりにあり、古くから、渡し場集落としての役割をはたしていました。すでに、平安時代中期の歌人赤染衛門が尾張へ行く途中、川岸近くの人家に泊まり七夕の月を鑑賞しています（「赤染衛門集」）。中世、京都と鎌倉の交通が盛んになると宿駅としての整備も進み、応仁2（1468）年の記録（「大乗院記録」）には京都より鎌倉に至る宿駅として「愛智川一里 四十九院二里」などと見え、当時、愛知川宿は四十九院（現、豊郷町内）から1里の所にあったことがわかります。

江戸時代始め、幕府により進められた中山道の宿駅整備の中で、愛知川宿も、それ以前の宿駅としての機能を受け継いで、新しく中山道の宿駅として整備されたものと思われます。北隣の高宮宿から2里、南隣の武佐宿まで2里半の位置にあり、江戸から65番目の中山道の宿駅でした。

＜愛知川宿の概要＞

江戸時代後期、天保14（1843）年頃の宿駅の概要を記録した「中山道宿村大概帳」によると、愛知川宿の町並みは5町34間（607メートル余）でした。宿内の惣家数は199軒、人口は929人。宿泊施設として、本陣が1軒、脇本陣が1軒、旅籠が28軒あり、運送施設としては問屋場が2箇所ありました。中山道の宿駅としては中規模の宿駅でした。

現在、宿場町の面影を伝える建物などは殆ど残っていませんが、沿道の要所々々に宿駅関係の石標が建てられており、往時の名残を今に伝えています。旧中宿村と愛知川宿の境界に地蔵堂があり、傍らに「愛知川宿北入口」の碑が立っています。その南方、現在の町の中央部には、愛知川に架かっていた「むちん橋」の由来や安藤広重描く浮世絵「木曾海道六拾九次」の内の「恵智川」が掲示されているポケットパークがあります。この辺りより南が江戸時代の愛知川宿の中心地です。路傍



愛知川宿絵図（江戸時代中期以降のもの）



脇本陣跡の付近（左下に石標）

に「親鸞聖人御聖跡」の碑が立つ宝満寺を過ぎるとクラシックな洋館が建っていますが、その辺りが本陣跡です。そのすぐ先が八幡神社で、その鳥居の傍らに「高札場跡」の石標があり、そのすぐ隣が脇本陣のあった所で、「脇本陣跡」の碑が立っています。また道路を隔てて斜め前には「問屋場跡」の碑があります。

愛知川宿の本陣は西沢家が世襲し代々甚五左衛門と称しました。天保14（1843）年当時、建物は門構え、玄関付で建坪142坪でした。脇本陣の建物も門構え、玄関付で建坪は131坪でした。天保14年当時28軒あった旅籠屋は、大7軒、中12軒、小9軒で、その多くは本陣脇本陣の近くに存在していました。参観交代など大通行の際には愛知川宿に接続している中宿村、沓掛村の民家も休泊の用に供せられました。

高札場は一箇所で、幕府の権威を象徴するいかめしい造りになっていました。宿駅の高札場には、駄賃人足賃の札が掲げられていました。愛知川宿の場合、正徳元（1711）年には高宮宿までの荷物一駄80文、人足一人41文であり、武佐宿までは同じく106文、50文でした。この賃銭は時代と共に上昇傾向にあり、天保年間には正徳年間の倍近くになっています。

宿駅が常備する宿建人馬は中山道の場合、50人50疋となっていますが、その維持はなかなか困難で、愛知川宿はじめ高宮宿など彦根

藩領内の宿駅の場合、実際負担したのは25人25疋で、残りは後述するように彦根藩が設けたその領内助郷が負担していました。

＜愛知川宿の助郷＞

助郷は宿駅で人馬が不足する場合に、それを補う村またはその負担をいいます。愛知川宿の場合、他の宿駅と同様に元禄7（1694）年に幕府によって20ヶ村が大助郷として指定されました。（東海道では定助郷と大助郷の別があったが、中山道では大助郷のみであり、享保10年に定助郷と改称。）その助郷役を負担する基準になる助郷高の合計は1万4161石であり、これは近辺の他宿と比較してほぼ同程度の助郷高です。

この愛知川宿大助郷20ヶ村のうち15ヶ村は彦根藩領の村でしたが、残り5ヶ村は他領（郡山藩領）の村でした。この5ヶ村は、その後、次々と彦根藩領の村と交代して、文政10（1827）年には、愛知川宿の助郷村は全て彦根藩領の村で占められるようになりました。この助郷村組み替えの背後には、彦根藩領の宿駅の助郷村はすべて自領内の村で統一したいという彦根藩の意向がはたらいていたと思われます。

また彦根藩領の宿駅には、幕府指定の助郷とは別に、藩独自の助郷が設置されていました。愛知川宿の場合、その村数は138ヶ村にのぼり、彦根藩領の大助郷の村を親郷とする17の組に分かれ、大助郷の村と協力して業務を果たしていました。これは宿駅関係の負担が、自領内において、宿駅や、幕府指定の大助郷の村に集中するのを避けて、できるだけ自領内に平均化しようとする彦根藩の政策であったと思われます。

ただ、助郷役をめぐる争論もいろいろあつたようで、享保20（1735）年には近隣の高宮・鳥居本宿と比べて、愛知川宿の人馬使用数が多くなると助郷側が訴えています。また元文2（1737）年には、親郷を勤める大助郷の負担

が小助郷に比して多すぎると訴えています。

<愛知川宿における大通行>

愛知川宿の本陣の記録によりますと、年により増減がありますが、大名はじめ幕吏、公家など年に十数家から四十数家の宿泊もしくは休憩があり、そのたびごとに多くの人馬負担があったと思われます。中でも幕府御用の御茶を運ぶ御茶壺道中は幕府の権威をかさにきた言動が多く、沿道の負担が過大であったと伝えられています。これらの通行は3月～5月に行われるが多く、田畠耕作と重なり、難渋したという記録が残っています。

將軍の通行は特に大騒動で、寛永11(1634)年3代将軍家光の上洛の際には、一行の通行日数36日に及び、彦根藩内の馬は悉く使役してもまだ不足で、耕作用の牛をも徵発したといわれています。後日の賃銭支払いのため、出役人馬に、その証として交付された木札が米俵に7俵にもなったと伝えられています。

幕末の文久元(1861)年、14代将軍家茂に降嫁する和宮の一行の通行の際には、一ヶ月前から関係役人の通行が相次ぎ、当日の10月23日には総勢6750人余りが、愛知川宿をはじめ中宿村、沓掛村等の家々を宿舎とし、多い場合は一軒に数十人も宿泊しました。

また元治2(1865)年5月、将軍家茂が長州出兵のため西上した際には、洪水にあい愛知川宿付近に数千人の一行が17日から20日朝まで逗留し、宿駅は混雑を極めました。和宮の通行と共に幕末の二大通行として語り継がれています。



安藤広重の浮世絵「恵智川（愛知川）」

<愛知川宿の名所・名物>

安藤広重が描いた愛知川（「恵智川」）の図は、愛知川に架かる長い橋のたもとで肥った黒牛を引く村娘とそれに話しかけている二人の虚無僧が情緒豊かに描かれています。そして傍らには「むちんはし、はし錢いらす」と書いた標注が立っています。

この無賃橋は愛知川の住人成宮弥次右衛門が文政12(1829)年に発議し、仲間を誘い彦根藩の後援を受け、募財に努め、天保2(1831)年に完成した無賃で渡れる橋です。

愛知川は普段は水なし川ですが、豪雨の際には出水が多く、渡河に失敗して溺死する人が多く、「人取り川」の名がついたほどでした。

元禄2(1689)年には川越賃銭を定め、川瀬踏み役が置かれ、また翌年には流水部分に仮橋が架けられ、番人を置いて渡河の安全をはかる一方では渡橋銭を徴収しました。その後も仮橋の架橋は何度も行われ、それと共に、法外な橋銭を徴収しないように等の注意が何度も出されています。このような中、成宮弥次右衛門らが協力して、だれでも安心して渡れる無賃橋が完成したのでした。当時、一般には渡橋に橋銭、渡り銭を必要とする場合が多い中、無賃で渡れる橋として有名になり、安藤広重の絵にも取り上げられたわけです。

現在、愛知川には立派な御幸橋が架かっていますが、そのたもとに大きな常夜灯があります。川を渡る人の安全のために目印として建てられたものです。高さ4.75メートル、笠の幅が2メートルもある巨大



愛知川河畔の常夜灯



中山道愛知川宿西側入口（近くに一里塚）

な石灯籠です。石に刻まれている文字から、愛知川や五個荘の多くの人々の寄進によって弘化3(1846)年に建立されたことがわかります。これは再建されたもので、以前から同様な灯籠が立っていたと思われます。無賃橋と共に愛知川を渡る人々の安全のために大きな役割を果たしてきた貴重な文化遺産です。

愛知川宿の南側のはずれ、中山道が国道8号線と合流する辺りには一里塚がありました。
「岐蘿路安見絵図」という江戸時代の旅行ガイドブックには東側の塚に榎が3本、西側には榎2本が描かれています。現在はその跡に「一里塚跡」の碑が立っています。一方、愛知川宿の北には中宿、沓掛と家並が続き、その沓掛の三叉路に「旗神豊満大社」と彫られた立派な石碑が立っています。この三叉路から約2キロほど南の豊満神社への道標です。この神社は神功皇后の軍旗をまつて創建されたと言い伝えのある由緒のある古社です。

宿駅には、それぞれ独特の名物がありますが、「木曽路名所図会」には「此宿は煎茶の名産にして、能く水に遭ふなり。銘を一溪茶といふ。」とあり、一溪茶と称する煎茶が名産であったことがわかります。また太田南畠は紀行文「壬戌紀行」に愛知川宿に関して「きぬ屋銘酒琴のねとかける招牌には心ひかれ侍り。」と記述しており、通りがかりに、銘酒「琴のね」の看板を見付けています。当時愛知川宿の名物の一つであったと思われます。また、不飲川のほとりでは忠兵衛の後家おやきさんが始めた名物の越川大福が売られて

いました。やき大福、ぼた福、栗大福などいろいろあり、安いわりに大きかったのでよく売れたということです。

不飲川に架かっている橋を不飲橋といいます。その近くに現在、料亭竹平楼があり、街道に面して「明治天皇御聖跡」の碑が立っています。明治11(1878)年、明治天皇が北陸巡幸の途中、小休をとられた所で、今もその「御座所」が残っています。室内に火鉢を並べて壁を乾かす等してやっと完成し、行幸に間に合ったと伝えられています。

不飲川の上流には不飲池があります。そこで平将門が身体のけがれを洗い落としたため、人々は嫌って池水を飲まなくなったという伝説があり、このため「不飲」という名前がついたと伝えられています。平将門にまつわる伝説は愛知川宿から北へ1.5キロ、宇曾川に架かる歌詰橋にも伝えられています。その近くに将門の首塚という古墳も存在しています。

ところで、愛知川宿の付近は中世以来、市がたち商業の盛んな所で、近江商人の出身地の一つでもありました。十辺舎一九の「木曾街道続膝栗毛」には、愛知川宿付近で、弥次さん喜多さんと道連れになった近辺のおやじが「モシ、おまいがたお江戸じゃな」「江戸どはえいとこじゃげな。わしどもの方から、皆お江戸へ見世出してじゃが、何ぢゃろと銭金はやっとあるとこじゃさうな」と問い合わせるところが描かれています。近江商人は江戸にも多く店を出しており、「膝栗毛」にも取り上げられるほど有名になっていたことがわかります。



「旗神豊満大社」(豊満神社)の道標

滋賀文化財教室シリーズ No.198号

発行年月日 2001年12月1日
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525